政治学における実験研究　その 2

多湖　淳*

はじめに

「政治学における実験研究　その 2」というタイトルでお話をします。このタイトル，いろいろクエスチョンマークがつきそうです。まず，政治学で何で実験なのか。そして，「その 2」とは何でしょうか。

まず，後者のクエスチョンからお答えしましょう。なぜ「その 2」かというと，1 年生のみなさん全員が履修する基礎授業の担当者のおひとりである河野勝先生が，2016 年に「政治学における実験」という題でお話されているのです。要するに，僕だけが実験するのではなく，河野先生のような著名な政治学者がたくさん実験を行う時代になっています。

私ですが，武力行使や安全保障を専門とする教員です。そうそう，『戦争とは何か』という中公新書を 2020 年に書いています。みなさん，携帯電話をお持ちですか。携帯電話，出していただいて，Amazon を開いていただいて，『戦争とは何か』と打っていただいて，クリックしていただくと，非常によろしいんですが。

脱線はさておき，実験が政治学において大事な手法なので，2 回目をやっています。政治学の方法として，記述推論というものがあります。昨今，ビッグデータが社会科学にも浸透して利用されていますが，それは世界の状態を記述するのが得意であり，その役目を担っています。社会科学におけるビッグデータの波とともに，現在，実験を軸とした因果推論がもう一つの大きな波として存在しています。ですので，因果推論という言葉は覚えて帰っていただきたい，「お土産」のキーワードです。私は安全保障が専門ですが，さすがに戦争を起こすという実験はしません。しかし，戦争を引き起こすような心理がどうやって生まれてしまうのか，実験室やオンラインにおけるサーベイ実験という手法で接近しています。

さて，政治学ではどのように実験をするのでしょうか。ドラマの「ガリレオ」で福山雅治さんが演じた湯川准教授がやるように，実験室という室内空間に被験者を集め，統制群と刺激群を分けて実験することもあります。さらには，最近は容易に被験者が集めやすい利点を生かして，オンラインの世論調査をうまく活用して，調査対象者を統制群と刺激群に分けて，比較する実験の形があります。

そもそも政治学とはなにか

実験について掘り下げる前に，そもそも政治学とは何でしょうか。おそらく，みなさんが基礎授業の教科書として使用する『政治学の第一歩』という非常によい教科書があります（著者を見るとなぜ私がこの本を非常によいと言っているのかが分かると思います）。その序章に，経済学との対照として，政治学は「社会における価値の権威的配分だ」という考え方が紹介されています。権威によって，社会のため，公共のために価値を配分する問題は政治学の問題対象になります。たとえば，領土とか領域の分配とか，国際組織の票数の配分とか，これは国際政治ですけれどね。安定的

＊　政治経済学術院・教授、オスロ平和研究所（PRIO）・グローバルフェロー

な統治の実現とか，いろいろなテーマが含まれます。国同士が領土をめぐって，たびたび武力衝突し，その度合いが顕著に大きな戦争になることもあります。政治学は領土や領域の分配問題の延長線上にある戦争も問題対象とします。

ここで，みなさんの政治学のイメージは，政治思想とか政治哲学とか政治史かもしれません。携帯電話をもう１回出していただいて，「齋藤純一（先生）」「公共性」と打ってみる。または「政治と複数性」と打ってみる。いい本ですから，そのままポチっと注文して読んでいただくといいと思います（正直，難しい内容ですが）。ほかには，土屋先生のこの『対日宣伝ビラ』もすごく面白い本です。また，田中孝彦先生は国際政治の先生ですが（このお写真からは強面の先生という印象を持つかもしれませんが，すごく優しい方なので，ぜひ授業をとってください），田中先生の『日英交流史』もよい本です。こういう歴史的な研究がみなさんの政治学のイメージかもしれません。実際，思想や哲学，歴史は政治学の「王道」だといえます。ですから，しっかり勉強してほしいと思います。

他方，今日これからお話しする政治学は実験で，かなり色が違います。スライドに「科学としての政治学」というタイトルで，ハーヴァード大学の今井耕介先生の本（*Quantitative Social Science: An Introduction*）を示していますが，私と同じぐらいの世代の方で，ビッグデータによる記述や実験による因果推論というのを政治学に導入するという動きの中心にいる方です。この本は日本語版もあり，とても役に立ちます。そして，ここで申し上げたいのは，科学的なデータ再現性のある政治学が急速に存在感を増している事実です。

科学としての政治学：囚人のジレンマの状態をヒントに

それを踏まえ，科学であることを意識した政治学（ポリティカル・サイエンス，略してポリサイ）の立場から，国際的な対立と協力についてのお話をして参ります。

ここにＡ国とＢ国がいるとしましょう。両国ともに相互に強い軍事力を持つ，たとえばアメリカとロシア（または中国）を想像してみてください。ＡもＢも政策選択肢として軍拡と軍縮という二つの可能性を有しています。国際関係は政府がなく，ＡもＢも相手に何かの政策を強制させることができない状態で，相手の手を見て（見てといっても，実際に見る前に予測してという方がいいかもしれませんが）戦略的に自分の選択を選ぶでしょう。このとき，ＡとＢが選択する政策の組み合わせで社会の状況が異なってくるのがわかります。すなわち，【A：軍縮，B：軍縮】【A：軍拡，B：軍縮】【A：軍縮，B：軍拡】【A：軍拡，B：軍拡】という風に４つの社会状態を想定できるのです。

このとき，ＡもＢもそれぞれの社会状態に異なる望ましさを想定すると考えましょう。Ａにとって（Ｂにとって）より望ましい状態が順序として仮定できると考えるわけです。先の，【A：軍縮，B：軍縮】【A：軍拡，B：軍縮】【A：軍縮，B：軍拡】【A：軍拡，B：軍拡】であれば，どうでしょうか？もっとも望ましいのは【A：軍縮，B：軍縮】でしょうか，または【A：軍拡，B：軍縮】でしょうか。

あなたが，【A：軍縮，B：軍縮】を望ましいとしたら，軍事力は問題解決にならない，平和には武器を捨てるのが大事だといったいわゆる平和研究の規範的な知識にどこかで接したのかもしれません。確かに，【A：軍縮，B：軍縮】は【A：軍拡，B：軍拡】よりもコストがかからないだけ，より望ましそうですが，問題はＡにとっては【A：軍拡，B：軍縮】がより望ましいのではないかという可能性です。

自国だけが軍拡すればそれをもってＢを脅し，相手に妥協させることができるかもしれません。または妥協などさせる必要なくても，自分だけが武器を持っているのは悪くない状態でしょう。相手よりも強い結果，相手の挑戦的な行動は抑止でき，安心して暮らせるという論理があると思います。そのように考える場合，いわゆる囚人のジレンマゲームと呼ばれる戦略状況が生まれます。

ここでＡとＢにとっての望ましさを４，３，２，１の順だとしましょう。４が一番いい。１が最悪です。このとき，自分だけが軍拡して相手が軍縮を４，逆に相手だけが軍拡して自分が軍縮は１と数字をおけるでしょう。そして，コストが高い分

だけ軍拡と軍拡の組み合わせは軍縮と軍縮の組み合わせにおとるため，それぞれ２と３となるはずです。このとき，合理的に自己利益を最大化するＡとＢは，軍拡ないし軍縮のどちらを選択するでしょうか。

先ほども少しふれたように，【Ａ：軍縮，Ｂ：軍縮】は３と３で足すと６です。社会にとってもっとも数字が大きい望ましい状態です。しかし，これは安定しないのです。社会的に安定してしまうのは実は【Ａ：軍拡，Ｂ：軍拡】なのです。両国ともに相手を出し抜こうとする誘因があり，しかも相手が軍縮するよという呼びかけをしてもそれを信じないといった要素があると，１回きりの同時手番のゲーム設定では，社会的な安定解（これをナッシュ均衡と呼ぶのですが）は【Ａ：軍拡，Ｂ：軍拡】になってしまうのです。これが，囚人のジレンマの基本構造です（図１を参照：Ａ国をロシア，Ｂ国をアメリカのように考えればよい）。

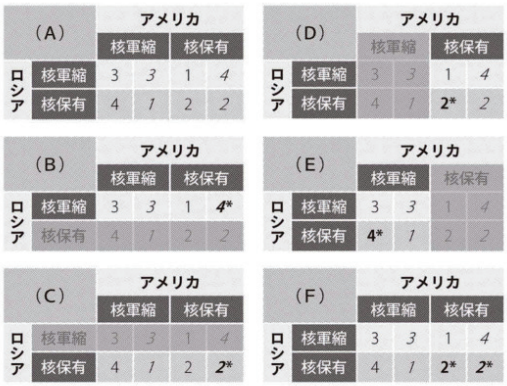


図14　軍縮と軍拡をめぐるゲーム　＊は最適対応で得られる利得．斜体はアメリカ，斜体でないものはロシアの利得．数字はそれぞれの国の選好（望ましさ）の順序を示す（４＞３＞２＞１）

図１：軍拡と軍縮をめぐる囚人のジレンマゲーム
（出典：多湖 2020 年，141 ページ）

なお，みなさんは国際関係論入門という私が担当する授業で秋学期に習うはずですが，同時手番の無限繰り返しゲームだと，将来の影という要素の登場で，【Ａ：軍縮，Ｂ：軍縮】が安定解になるということもご紹介しますから，あまり悲観的になりすぎることもありません。いま，私が何を言っているのか分からない人は，「囚人のジレンマゲーム」としゃべっていた先生がいたなと，覚えておいてくれたらよいです。そして，それを実験で今から確かめる点も覚えていてくださったら幸いです。

見えない危機の実験

具体的な実証研究を紹介しましょう。アメリカの主要紙である『ワシントン・ポスト』に，私たちの研究チームが書いた記事と専門学術誌で公刊した研究の話です（Kohama, Shoko, Kazunori Inamasu and Atsushi Tago 2017. “To Denounce, or Not To Denounce: Survey Experiments on Diplomatic Quarrels”, *Political Communication*, 34:2, 243-260）。みなさんは戦闘機のスクランブルって聞いたこと，ありますでしょうか。きっと，どこかでありますよね。または，戦闘機のニアミスという表現もあるかもしれません。

さて，みなさんはスクランブルやニアミスを見たことがありますか。見たことがあるという方，ぜひ手を挙げてください。言葉を知っているという方。それを見たことがあるという方。あれ。どうでしょうか。みなさんの手のあがり方をみて，ちょっとわかったでしょうか。

そうなのです。戦闘機のスクランブル事案も，ニアミス事案も，ほとんどの場合，イメージ図だったり，航空機から「当事者」がそれらしくとった映像，写真になります。第三者のメディアがとったり，衛星写真の証拠として出されてきたものではありません。実際，ニアミスとかスクランブルの写真や映像を撮ろうとするのは大変です。きわめて短時間，いわば「一瞬」の出来事ゆえ，記録されにくいのです。

ですので，これらの事件は実は「見えない危機」だということが言えます。誰も見ていない遠隔地，国境地帯等でそういった事件は起きます。瞬時ですから，客観的には補足がきわめて難しい。しかし，当事者である「政府」が何か言うから，見える。言い方を変えれば，政府が何を言うかで，危機になります。

実は，よく考えていただくと，国境地帯の遠隔地で誰も見ていないところで事件があっても，両国政府が何も言わないという穏便で両国関係を悪化させない選択肢があります。外交当事者だけが

相互にコミュニケーションをとり，処理しておくという可能性があるのです。でも，実際にはそういった穏便な社会状況は，特に最近の東アジアでは減っている印象で，2014 年の日中の戦闘機スクランブル事案や 2018 年末の日韓のレーダー照射事件のように政府の間の非難合戦がたびたび起きています。

では，どうして非難合戦がたびたび起きる＝社会的な安定解なのでしょうか。そこで登場するのが実験です（特にここで使用したものは，オンライン・サーベイ実験といいます）。

私たちの研究チームは，こういった危機に接しての政府情報が必ず英語で発信される，つまり自国民だけではなく対外的な第三国の反応を意識していることにまず気が付きました。そして，ノーコメントという穏便な反応のほか，自国は国際法にのっとっていたといった自己正当化の反応，そして相手国が問題行為をしていて批判されるべきだという非難の反応があるという分析も行いました（量的テキスト分析というものです）。そして，この結果を用いて，実験をしてみました。

つまり，架空の戦闘機ニアミス事件に関する文章を読んでもらって，実験なので政府の公式発表の文言の部分だけ群ごとに違うというものを設定して，見せてあげました。すると，ノーコメントではなく相手を強く非難して危機を見える化してしまう理由は，強い非難メッセージを発しているときに，その発表を行う政府を第三国の市民がより支持しやすいことにあるとわかりました。つまり，世界の世論を味方につけようと考えると，黙っていたり，自己弁護よりも，危機を積極的に見える化して，相手に対する強い非難をするほかないという行動が見えてくるのです。ただ，ジレンマなのは，相手も非難すると支持は相対的に下げ止まりの状態で，両者ともに共倒れになります。

図 2 は日本で行った実験のデータになりますが，S は沈黙，SP は自己正当化，D は相手国非難にあたり，それぞれ攻撃側（Attacker）と被攻撃側（Attacked）の選択の組み合わせに対応して，攻撃側の国への支持の高さを平均値として示しています。相手国非難をしていると，その相手が沈黙や自己正当化をとっている限り，平均値が 3 付近にあり，高い支持を得られます。他方で，自分が沈黙していると（Attacker の S に着目）1．5 程度の支持しか得られないことがわかります。沈黙は金なりとはならないのです。そしてこの背後には先ほど紹介した囚人のジレンマゲームのメカニズムがあります。相手を信用できない戦略的関係では出し抜かれないよう，自ら積極的に非難合戦に参加し，（穏便に済ませるという手もあるはず

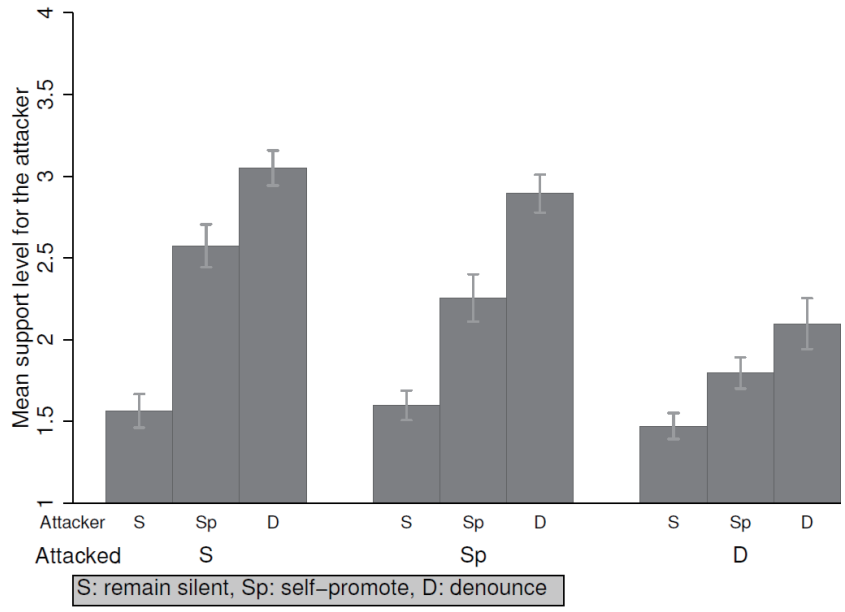


図 2：攻撃側に対する支持の平均値（出典：多湖淳@ CROP-IT プロジェクト）

なのに）危機を見える化してしまうわけです。

そのほかの実験

ほかにも，映像を実験に使うこともできます。Facebook にアメリカ軍が作った，38 秒の映像を用いた実験があります（Asaba, Yuki, Kyu S Hahn, Seulgi Jang, Tetsuro Kobayashi, Atsushi Tago 2020. “38 seconds above the 38th parallel: how short video clips produced by the US military can promote alignment despite antagonism between Japan and Korea,” *International Relations of the Asia-Pacific*, 20(2): 253–273）。スライドの上の映像は，北朝鮮に対して，日本と韓国とアメリカが共同して，力を合わせて協力していますという CM です。日韓に協力を呼び掛けるメッセージになっています。下の映像は，ワニが目立ちますが，オーストラリアで米軍が軍事演習をしましたという，同じ年に作った，38 秒のミリタリー映像です。日韓はまったく示唆されません。前者の映像を刺激群，後者の映像を統制群として，日本人と韓国人に見てもらいました。刺激群の映像はアメリカ軍の意図通りに日韓の協力の機運を高めるのでしょうか。

ランダムに映像を被験者に割り当てているので統制群と刺激群の両グループでの違いは，どの映像を見たかにしかありません。結果を見ると，日本人の中で刺激映像を見ると，22 ポイント分，安全保障上の協力を日韓でしたほうがいいという数字が増えます。ケース・バイ・ケースの協力をしたほうがいいという人も増えます。残念ながら，韓国ではそう大きくは統計的に意味がある数字は出なかったのですが，条件がついていて，韓国の左派には映像の影響が出て，日韓の協力を支持する程度が同国の右派の人くらいまで戻るという結果が得られました。

結　　語

以上のように，政治学でも実験をする時代になっています。そして，それは因果推論という目的のために使われます。原因を特定するための社会科学のアプローチです。早稲田大学には学生にも利用できる Qualtrics のアカウントがあり，自分で実験を作成し，実施できる環境があります。研究倫理審査を経ないと実験はできないので，その点だけ注意ですが，先端的な科学としての政治学をする場所として，早稲田大学政治経済学部のリソースを活かして，面白い研究をしてほしいと思います。

最後に，tip を二つほどお示しして終わります。まず，先生がどういった研究をしているのかを調べる力をつけましょう。その点で，みなさんは，Google Scholar というサービスを知っているでしょうか。先生も人間ですから，自分の研究をちょっとでも知って，さらには少しでも読んでいてくれると嬉しいものです。先生もそんな学生さんにはすごい関心を持ち，積極的に接してくれると思います。いい球を打つとよりいい球で返してくれるテニスのようなものです。今日紹介した論文について，それに関連する研究なんかも，Google Scholar の上で，cited by というマークを押すと，検索でき，芋づる式で研究を見ていくことができます。ぜひ，みなさんも効率的に研究情報を収集するとよいと思います。

英語に自信がないなという人。毎日やるしかないですよね，言語は。私も，ヘッドホンをして，毎日，細切れ時間を中心に英語を聞いています。研究とのつながりでは，TED のシリーズはおススメです。たとえば，社会心理学者のダン・アリエリー先生のこの TED なんか，特によいです。実験をやる人は，アリエリー先生の TED を聞くとどういう考え方で被験者に接するべきかについても学べるでしょう。さらに，読む英語も大事ですね。その意味では，さきほどワシントンポストの話を出しましたけれど，『Monkey Cage』というのが，政治学の研究者にとって大事な媒体になっています。論文そのものではなくて，研究論文のエッセンスを載せるという取り組みです。月 5 回までは，無料で読めます。月 5 本で十分いい訓練になると思います。みなさんと一緒に，政治学の研究をすることを楽しみにしつつ，私の話は終わりにしたいと思います。

［新入生への推薦図書３点］

１．手前味噌ですが，多湖淳『戦争とは何か』中公新書，2020 年。

２．政治学で実験といえば，河野勝『政治を科学することは可能か』中央公論新社，2018 年。

３．アリエリーは原典で，Ariely, Dan (2008) *Predictably Irrational: The Hidden Forces That Shape Our Decisions*. New York: Harper Collins。

＊脱稿後の 2021 年 8 月に，ダン・アリエリー教授らの 2012 年の実験研究に深刻なデータ収集および処理上の問題があったとする匿名の論考が公開された（https://datacolada.org/98）。多面的な検討で，一部データの捏造の恐れが指摘されており，傾聴に値する。まだ論争の途中ゆえ，読者に注意喚起を行うにとどめておく。なお，こういった疑いが呈示されるのは科学としての営みがある証拠だともいえる（もちろん，そもそもそんな疑念の付されるような研究や分析を避けることが大事なのだが，第三者の検証を乗り越えて科学的な知識は定まっていく）。データを公開して透明性の上で研究をすることの重要性がここにあらわれている。